

現代短歌の中の地球科学

～地軸, 地電流, ゴンドワナ大陸, 隕石～

仰向けの髪つくづくと梳かれゐて
地軸といふほどの方向か

大西民子「花溢れるき」

地軸が23.4°傾いている, ということは詩人の感性を刺激するようです。たしかに, だから日本には四季がある, と学校では習いました。この歌の場面はたぶん美容院で椅子の背もたれを倒し髪を梳いてもらっている時に, ふと方向感覚が無くなった気がしたのだと思います。そして日頃は意識していないけれど地球が回っていると言うことを思い浮かべたのでしょうか。

地磁気はつかな電流となり流れいん
秋の宙航^{そらゆ}候鳥^{こうちよう}のうち

永田和宏「華氏」

地球は大きな磁石です。ところで, 地学の教科書を見ると地球の中心に大きな棒磁石が描いてありますが, 物理の教科書を見ると電流の回りに磁力線が描いてあります。ここで候鳥は渡り鳥のことで, 渡り鳥が方位を間違わないのは体内に磁石を持っているからと言われていますが, 棒磁石ではなく電流があって磁気がある……というイメージなのです。本当は作者の認識が正しいと思いますが, 私自身はすぐに頭に棒磁石の入っている鳥のイラストを思い浮かべてしまった(走磁性細菌は頭に強磁性体を持っているようですが)ので, 地学と物理の地球磁場に対するイメージの違いが面白かったのです。

ゴンドワナなる大陸がありし世も地球の河に
風添い走る

井辻朱美「吟遊詩人」

ゴンドワナ大陸は, 現在の説では3億年前よりも新しい時代に超大陸パンゲアがまず2つに分裂し

たうちの南側の大陸を指し, 現在のアフリカ, 南アメリカ, オーストラリア, 南極大陸に相当します。分裂した北側の大陸はローラシア大陸といい, 二つの大陸に挟まれた海をテチス海と呼びます。ところで, なぜこの歌ではゴンドワナ大陸なのか, は作者に聞かないとわかりませんが, 南半球の方が太古代……の荒涼としたイメージ(?)が残っているのかもしれませんが。同じ作者に「ふるき世のパンゲア大陸よりわれに輪廻のはての陽がそそぐなり」や「ウエゲナーは冬なつかしき 風すさぶ天にわかれてゆく雲の大陸」という短歌もあります。

月のおもて寂しき隕石のかけ曳くを
思いて眠る霜告ぐる夜を

近藤芳美「黒豹」

これは実際に隕石を拾ったとか見たというのではなく, 隕石が宇宙空間を飛んでいる様を想像して作った短歌だと思います。隕石という言葉を使っていますがいわゆる流れ星をイメージしているのでしょうか。

この連載は一応ここで終了します。地球科学の用語が専門から離れて, 自分の言葉として自由にイメージを膨らませている一つの形がこれらの短歌だと思えます。短歌は作る方はもちろんですが, 読む方にも自由に想像を膨らませる余地がある詩形です。地球科学が専門だけでなく文学の楽しみにもなっているのはうれしいことです。新しい短歌に出会えたら, またご紹介したいと思います。つたないコラムにおつきあい下さいましてありがとうございました。

作者紹介

大西民子: 大正13年宮城県生まれ, 平成6年没。
永田和宏: 昭和22年滋賀県生まれ。
井辻朱美: 昭和30年東京都生まれ。
近藤芳美: 大正2年朝鮮生まれ。

森尻理恵(産総研 地球科学情報研究部門 地球物理情報研究グループ)